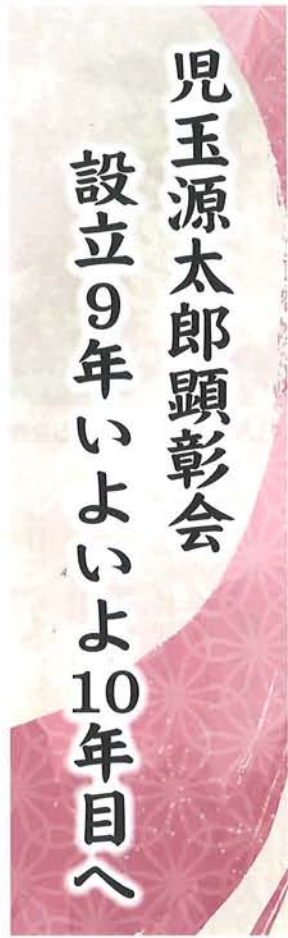




編集・発行
 児玉源太郎顕彰会
 〒745-0874
 山口県周南市公園区5854-41
 周南文化協会 内
 TEL. 0834-22-8190

印刷 (有) 精文社
 山口県周南市若宮町1-55
 TEL. 0834-21-1611



ふるさとの偉人、児玉源太郎の功績を伝えたいと平成28年（2016）6月に児玉源太郎顕彰会を設立して丁度9年。この6月で10年目へ入ります。次世代への継承を念頭に構想を描いて実践を重ねてきました。

設立発起人5人のうち、初代会長の小川亮さん（元徳山市長）、副会長の赤尾嘉文さん（山口放送相談役）、副会長から名誉会長を務めた黒神公直さん（遠石八幡宮名誉宮司）は旅立たれ、令和元年からは山下武右さん（山下内科医院院長）が2代目会長に就任しています。

当初は顕彰会の組織を作り、地道に継続して活動することを主眼

に置いて発足しました。総会と会報、講演会を柱にして活動を始めました。継続できる組織作りはこの町の悲願だっただけに全国の児玉源太郎ファンを含めて初年度の会員は500人を超えました。今も300人から400人の会員を維持してその意識の高さに敬服します。

顕彰会の活動の小さな一歩が道を切り拓いてきたことに大きな喜びを感じます。この9年の足跡を振り返り、10年目へ向けて展望します。

【平成28年（2016）】
 児玉源太郎没後110年の節目。設立総会を6月9日に周南市文化会館で開催。会報『藤園』創刊号（以

下）

降、年1回発行）を10月1日発行、本格的な活動を始めるための設立記念式典を10月8日に周南市の遠石会館で開催しました。『藤園』は源太郎の雅号から。

【平成29年（2017）】
 ニュースレター『本丁通信』創

刊号を3月25日に発行。（以降、年2回発行）。題名は源太郎の生家があった地名「本丁」から。命日7月24日を「藤園忌」と定めて児玉神社で命日祭、児玉家の菩提寺・興元寺墓所で墓前供養を、周南文化協会の協力で記念の茶会と俳句募集を始めました。



第1回藤園忌茶会（平成29年7月23日）

【平成30年（2018）】

顕彰会が中心となって「明治維新百五十年回想と顕彰」周南実行



第2回藤園忌命日祭（平成30年7月24日）

委員会（小川亮会長）を発足、4月22日に祐綏神社で奉祝祭、9月23日に山口県周防部の史跡探訪バス、12月19日に明治の酒と食を再現した「明治維新百五十年の宴」を遠石会館で開催しました。

【平成31年・令和元年（2019）】

1月16日に小川会長逝去。5月に元号が令和に。5月25日に赤尾嘉文副会長逝去。同日の総会で山下武右理事を二代目会長に選出。2月15日から3日間「児玉源太郎の足跡をたどる台湾の旅」を実施しました。

【令和2年（2020）】

源太郎の生涯を描いたDVD『児玉源太郎・未来を築く』（全3

巻)完成。周南市の小・中学校、高校、大学、図書館、市民センター、国会図書館、47都道府県の中央図書館などに寄贈しました。

【令和3年(2021)】

令和4年の児玉神社遷座百年を控えて7月24日に奉賛会(山下武右会長)を発足。社殿や境内の修復整備工事の資金集めなど顕彰会も支援しました。

【令和4年(2022)】

3月10日の児玉神社例祭で起工、7月24日の「藤園忌」命日祭で竣工。児玉本家(東京)をお招きして10月23日に遷座百年奉祝祭を挙げる。同日午後から記念式典と祝宴を遠石会館で催しました。



児玉神社遷座百年記念式典・祝宴(遠石会館)

【令和5年(2023)】
7月24日の「藤園忌」の日に児

玉神社遷座百年奉賛会の解散総会。所期の目的を達成しました。小冊子『児玉神社遷座百年の記録』を刊行。顕彰会の拠点作りへ向けて検討会議を重ね、社務所と一体化させた構想をまとめました。

【令和6年(2024)】

児玉神社社務所建て替えに伴う

徳機株式会社名誉会長

児玉源太郎顕彰会副会長

岡田幹矢さん
ご逝去



徳機株式会社名誉会長で、児玉

源太郎顕彰会副会長の岡田幹矢さんが昨年12月17日逝去されました。享年83。家族葬にて18日に通夜、19日に葬儀が営まれましたが、それでも訃報に接して多くの友人、知人が駆けつけました。お別れ会は徳機株式会社によって2月25日、サンルートホテル徳山で盛大に開催、県内外から1000人の方々が感謝を捧げて別れを惜しまれました。喪主は長男で徳機代表取締役の岡田哲矢さん。「父は仕事を通じて多くの人と交わり、充実した人生でした。長い間、ほんとうにお世話になりました。多くの人に送られて喜んでいいると思います」と話されました。

児玉源太郎顕彰会の事務局移転について6月8日の総会で了承を得て、児玉神社と設計協議を重ねました。7年度で社務所を解体して新築、年度内の竣工と事務局移転を予定。10周年事業として取り組み、支援します。



岡田幹矢お別れ会。献花して拝礼する山下武右会長

太平洋戦争開戦の年、昭和16年に生まれ、2歳まで満州で育ち、戦後しばらくして家族で北九州から徳山へ。岐陽中から徳山高を経



お別れ会の岡田幹矢メモリアルコーナー

て立教大学を卒業後、父の利徳さんが興した事業をさらに発展、海外にも進出して今日の徳機へと飛躍させました。ケーブルテレビのシティーケーブル周南(CCS)社長、徳山商工会議所会頭、平成30年春の叙勲で旭日小綬章を受章。ロータリークラブでも活躍、地区ガバナーを務めました。

徳機は平成26年8月に周南市岐山通3丁目8番の所有地を市に寄贈、市ではこれを受けて産湯の井戸のある「児玉源太郎誕生の地」として整備、翌年9月に完成披露。これを機に児玉源太郎顕彰会は発足しました。「児玉源太郎は世界ブランド」といって顕彰会の活動にも尽力されました。

児玉神社社務所建て替え

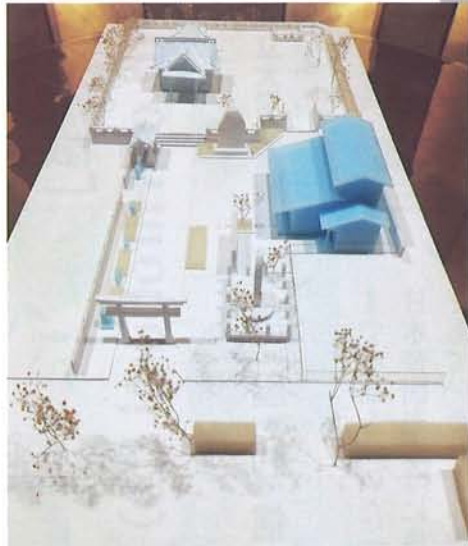
児玉源太郎顕彰会事務局移転へ



児玉神社社務所

昨年6月8日の総会で社務所の建て替えと顕彰会事務局の移転について説明して了承を得ました。そのあと、児玉神社と設計協議を重ねて内容を具体化させました。神職の住居を兼ねた社務所には新たに御守や御朱印帳などの授与所を設け、参拝客への対応をします。現在の社務所は木造平屋建て、神職の住居部分だけで授与所はありません。建築後すでに40年を経過して老朽化しています。現在地に建て替える新しい社務所は木造

児玉神社（黒神直大宮司）は、老朽化した社務所の建て替えをいよいよ令和7年度に着工します。現在の建物を取り壊し、7年度中に竣工。周南文化協会に置いている児玉源太郎顕彰会（山下武右会長）事務局を社務所の一角に移転します。



児玉神社境内と社務所完成模型

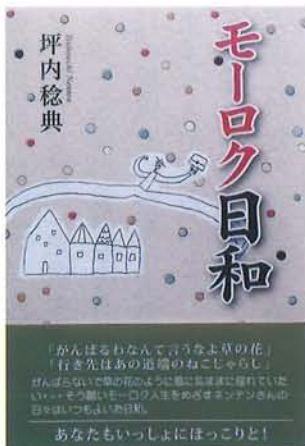
2階建て、1階の北側に授与所と顕彰会事務局を設けます。令和7年度は顕彰会を設立して10年目に入ります。社務所の建て替えは児玉神社が行い、顕彰会が支援します。2月27日の役員会では百分の一サイズの模型を展示して詳細を説明、了承されました。支援についての趣意書や具体的な方法については5月22日の役員会と6月7日の総会で説明して皆様方へのご理解とご協力をお願いすることにしています。

新刊紹介

『モーロク日和』

藤園忌俳句選者

坪内稔典 著



俳人の坪内稔典さんの『モーロク日和』が創風社出版（松山市）から1月25日に刊行されました。

産経新聞大阪版に2016年8月から2017年12月にかけて連載されたものを1冊にまとめました。このモーロクシリーズは岩波書店から『モーロクのすすめ 10の指南』『ヒマ道楽』の2冊になっていて『モーロク日和』はその続きです。1300円（税別）。

「春・あんぱんの食べ方」「夏・軽井沢する」「秋・墓地付属」「冬・女はランチ 男は昼飯」と季節に分けて45編を掲載しています。身近な題材から自由奔放に筆は進み、読んでいると心が軽やかになります。ほけたことを楽しんでいる詩人まど・みちおの言葉にも触れて「まどさんはわがモーロク日和の屈強の先輩である」と。「へお正月清く正しくとうと」と。「へおの初俳句。清く正しくときたら、美しくとあるべきだろうが、うとうとする快樂をこそ求めたい」。

あなたもいっしょにほっこりといきましょう。そんな気分になさせてくれる楽しい一冊です。坪内さんは京都教育大学・佛敎大学名誉教授。公益財団法人柿衛文庫理事長。2018年の第2回「藤園忌俳句」から選者。毎日新聞に「季語刻々」連載中です。

「伊藤博文の流儀」

(The Style of Hirobumi Ito)

周南公立大学客員教授
福屋利信



公開シンポジウム

伊藤博文の流儀

The Style of Hirobumi Ito

令和6年 11月3日(日・祝)
13:00→15:00

周南市立徳山駅前図書館3F 交流室2にて

初代内閣総理大臣・伊藤博文は明治のグローバル人材だった！

福屋利信
「伊藤博文の流儀」と題し、サンフランシスコでの英語スピーチの経緯を語る。

一坂太郎
「伊藤博文の流儀」を著し、著書『伊藤博文の流儀』を著す。

令和6年11月3日(日・祝) 13:00→15:00
周南市立徳山駅前図書館3F 交流室2にて

参加費：無料
定員：50名(先着順) ※要予約
お問い合わせ：周南市立徳山駅前図書館 TEL: 0834-34-0834

伊藤公シンポジウム チラシ

まで心血を注いだ「大日本帝国憲法」に焦点をあて、それを「伊藤博文の流儀の完成形」と位置づけてみたい。

憲法草案を審議する枢密院(議長は伊藤)での審議の焦点は、天皇と帝国議会との関係性を巡っての議論であった。草案

第五条「天皇ハ帝国議会ノ承認ヲ經テ立法権ヲ施行ス」の「承認」なる表現を巡って激しい議論がなされた。元田永孚^{ながゆ}枢密顧問官は、「承認」という語は、下から上に

対して認可を求める意味であり、天皇と議会の位置づけが反対だと主張した。しかし伊藤は、この「承認」の二字こそ立憲政体の本質を示しており、これがなくては立憲政治の意義を失わせてしまうと反論した。「憲法が国民を守らねば、誰が国民を守るのか!」が、

伊藤の魂の叫びだった。そこで伊藤は、「承認」を「翼賛」、さらに「協賛」と改め、成文では、「天皇ハ帝国議会ノ協賛ヲ以て立法権ヲ行フ」とし、さらに熟議を重ねた後、やっと天皇の裁可が下りた。伊藤は、妥協しつつも、天皇大権は拘束すべきではないという意見を、不退転の決意で斥けたのだった。天皇も伊藤の立憲君主論に理解を示していた。

明治天皇の伊藤への理解は、伊藤の功績に対して、天皇が勲一等旭日桐花大綬章を授与したことに表れている。薩長のバランスを考慮して三条実美公は、薩摩出身の黒田清隆首相に対しても授与を奏請したが、天皇は断固として応じなかった。これは、内閣総理大臣の職を投げうっても憲法発布に命を賭けた伊藤の勲功は、伊藤の後を受けて首相に就任した黒田とは比べるべくもないと考えられたからであろう。

一方で伊藤は、自由民権運動派のように一気に立憲民主制にまで持っていくのは、少し前まで鎖国政策をとっていた日本には時期尚早と考えた。それについては、伊藤自身が以下のように言っている。

我國實際の事情に適合すべき憲法を採定せんと欲せば、我社會上の特質を斟酌する事最も丁寧親切なるを要す。(中略)例へば言論の自由を愛し議事の公開を愛し若くは自家に反対の意見を寛容するの精神の如きは更に幾多の経験を積み然る後始めて之を得べき也。(小松緑『伊藤公全集第一巻』(昭和出版社、一九二八年))

ここで伊藤が言う、国民に更なる高度の自由を与えるのは「更に幾多の経験を積み然る後」とは、後の史実に照らし合わせてみれば、太平洋戦争での完全降伏後、米國主導ながら「日本国憲法」の立憲



公開シンポジウムで講演する福屋利信氏

民主制を日本が受け入れたときのことになる。伊藤の確立した立憲政治が轍となっていなかったら、このときの日本の「近代から現代への移行」は、少し違ったものになっていたかも知れない。

ともあれ、辛い戦争から解放され、新たな民主政治のもとで、筆者の父親・母親の世代は、額に汗して「敗戦」の残り香が燻る焼け跡から這い上がろうと一心不乱に働いた。そのおかげで、我々「戦争を知らない子供たち」は、髪を肩までのばしてGパンを穿いて「反体制」などと生意気なことを口にする青春を謳歌していた。それが伊藤をはじめとする先人たちによる「体制作り」がもたらしてくれた豊かさ―その中でこそ許された「反体制ごっこ」だったと気づいたのは、還暦を過ぎた頃であった。そこでせめてもの罪滅ぼしに、古希をとうに過ぎた今年の6月1日、『伊藤博文の流儀』（ミネルヴァ書房）なる本を上梓する予定だ。伊藤博文という明治の英雄を、令和の御代で「再起動」させてみたい。

Edward Carr の名著『歴史とは何か』（岩波書店、1962年）を翻訳した清水健太郎は、「歴史

とは現在と過去との対話である。現在に生きる私たちは、過去を主体的に捉えることなしに未来への展望をたてることはできない」という一文を寄せている。そうなのだ。過去への「知識」を現在及び未来への「知恵」に変換し「再起動」できたとき、歴史は社会的意義を高める。

なお、米国エール大学は、伊藤が「大日本帝国憲法」の草案を作成し、発布にまで導いたことを高く評価し、法学名誉博士号を伊藤に授与している。当時熾烈な政争の渦中にあった伊藤にとって、自身の憲法作成への努力が評価されたことは、一服の清涼剤であったに違いない。加えて、ここでのエール大学の伊藤への学位授与は、その時点での過去を現在に「再認識」させようとする営為に他ならなかった。



明治34年、米エール大学より法学名誉博士号を受けた伊藤

『文藝春秋』4月号 藤原正彦「追憶の紀元節」 渋沢栄一と児玉源太郎を紹介

作家で数学者の藤原正彦さんが『文藝春秋』に毎月連載している「古風堂々」。連載71回目の4月号で「追憶の紀元節」と題して渋沢栄一と児玉源太郎の日露戦争戦費調達の見聞場面を紹介しています。紀元節とは今の「建国記念の日」。藤原さんが小学生の頃、隣家には祝日に大きな日の丸が掲げられました。ある日、隣のおじいさんが「今日2月11日はね、紀元節といって、神武天皇が即位された日、日本という国が生まれたお目出たい日なんだよ」「日露戦争が始まった年の紀元節は今も思い出すよ。明治天皇が宣戦の詔勅を出された翌日だったからね」と教えてくれたそうです。

おじいさんの父親は穂積陳重東大法学部長で、母親の歌子は渋沢栄一の長女でした。そこで渋沢栄一と児玉源太郎が登場します。明治36年夏、文部大臣兼内務大臣の児玉源太郎中将が渋沢の事務所を訪問。日露開戦の避けられないこ



『文藝春秋』4月号

とを告げ、戦費調達の協力を懇請したが非戦論の渋沢は承諾しなかった。「秋になって大臣をすべて辞し、格下の参謀次長を引き受け、対露作戦を日夜練っていた児玉は、渋沢を再訪した。国の運命を双肩に担った児玉は、渋沢の協力を諦め切れず、戦時公債を財界が引き受けてくれるよう必死に説得した。『勝つ見込みは』ありません。しかし維新以来皇民一体で築き上げてきた我が帝国を守るため、万死に一生を期して戦うしか他に道がないのです。ついに涙声となった児玉を見て、渋沢も涙を流しながらとうとう『全力で協力しましょう』と約束したのだった。この会見の成果が日露戦争に大きな意味をもたらしました。

勝利の翌年、児玉は数え55歳の若さで他界。二年後の明治41年、この時の縁で児玉の娘が渋沢の孫、穂積重遠（後に東大法学部長）と結婚しました。おじいさんの長兄にあたります。縁は不思議なものです。

昭和100年と戦後80年 時代の変革への道標は

児玉源太郎顕彰会事務局長 西崎博史



今年には昭和元年から数えて「昭和100年」、太平洋戦争の敗戦から「戦後80年」。大きな節目にあたります。混迷を深める世界と日本。自国第一主義や覇権主義が幅を利かせる中、平和と民主主義を立て直す覚悟が求められています。

大正15年（1926）12月25日、大正天皇が崩御、摂政皇太子裕仁親王が天皇の地位を受け継いで昭和に改元されました。今年で100年目です。昭和は64年1月8日で平成に、平成は31年5月1日で令和の世に変わりました。太平洋戦争が終わったのが昭和20年（1945）8月15日。この日正午、戦争終結を伝える昭和天皇の「玉音放送」がラジオから流されました。以来、80年の歳月です。

幕府の大政奉還によって新政府樹立へ。日本の近代化を推進した明治時代は元年（1868）から45年（1912）まで。元年に江戸を東京と改め、一世一元の制をたて、翌年古い伝統のまつわる京都から東京に首都を移しました。

大正はわずか15年、明治から数えても60年です。

降る雪や明治は遠くなりにけり

明治34年に生まれた俳人、中村草田男の句はあまりにも有名。昭和11年に刊行した第一句集「長子」に収められた一句です。20年ぶりに青山南町の母校、青南小学校辺りを歩いていると雪が降ってきてその歳月に感懐を抱いたようです。令和の世からみれば「昭和は遠くなりにけり」の思いです。

今年元日の新聞各紙は社説で次のように論じています。「不確実さ増す時代に 政治を凝視し強い社会築く」（朝日）「混迷する世界と日本 『人道第一』の秩序構築を」（毎日）「平和と民主主義を立て直す時 協調の理念掲げ日本が先頭に」（読売）「変革に挑み次世代に希望つなごう」（日経）。いずれの論調ももともとです。拮抗し、せめぎ合う社会でどのように実現していくか。政治と経済、社会が微妙に絡み合う中でいかに行動し

ていくか。内政と外交をにらみながら細心かつ大胆な発想と挑戦で難局を乗り切らなければなりません。

新政府は明治の世になって急速に近代化を推進しました。版籍奉還、廃藩置県、地租改正と国家の体制を整えて明治18年内閣制度を創設、伊藤博文らの尽力で22年大日本帝国憲法発布、アジアで初めての近代的立憲国家となりました。明治38年（1905）日露戦争で勝利して今年で120年。1月に激しい攻防戦で旅順を陥れ、3月に奉天の会戦で勝利を収めました。児玉源太郎が総参謀長として活躍した、日本の独立を守るための戦いでした。欧米列強の植民



新聞各紙の元日社説

地支配をはねのけた日本の勝利はアジア各国を勇気づけました。

大正は民衆の時代と言われる中、第一次世界大戦と関東大震災を経験。昭和に入ると世界恐慌を背景に軍部が台頭し、中国への派兵をきっかけに長い戦争に突入。米国の無謀な戦いの末に約310万人の戦没者を出して敗戦に。平和憲法の下で復興を果たし、山あり谷ありの昭和の世が終わりを告げました。「失われた30年」の平成から激動の令和へ。未曾有のコロナ禍、ロシアのウクライナ侵攻とかつてない不確実な世界に翻弄されています。

明治元年から太平洋戦争終結の昭和20年までの近代史と対照して戦後の現代史をどう捉えるのか。戦後80年というだけでは余りにも実態がつかみにくいです。現代史を実証主義的に描いてきたノンフィクション作家の保坂正康さんは次のように言います。「私は〈昭和100年〉を使うたびに、昭和前期の誤りを克服しているか否かを自問する」として「〈戦後〉」という言葉を「非戦を誓った戦後80年」などの表現に置き換えるべきではないだろうか。また「日本の特異性を考え抜いて新たな平和論を展開してほしい」と若者に期待します。



NHKドラマ「坂の上の雲」 再放送に話題沸騰!

昨年9月8日から再放送が始まったNHK総合のスペシャルドラマ「坂の上の雲」が大好評です。年明けから日露戦争最大の激戦「旅順攻囲戦」で二〇三高地攻略の場面は固唾をのんで見ました。壮絶なドラマに乃木希典や児玉源太郎がいかに苦悩したかを痛感しました。再放送は3月9日終了。「あのドラマを見ていますか」



産経新聞に連載された「坂の上の雲」

「日曜日の夜は欠かさず見ています」。こんな会話がよく交わされます。児玉源太郎顕彰会事務局にも会員から連絡が入ります。顕彰会役員会でも話題に上ります。日本の近代史上、大きな出来事であった日清戦争、日露戦争。児玉源太郎が何を考え、どう生き抜いたか。とても参考になるドラマで、若い人にも分かりやすかったのは、と思います。

司馬遼太郎の代表作『坂の上の雲』は昭和43年(1968)4月から47年8月まで産経新聞夕刊に連載されました。NHKが総合テレビで取り上げたのが平成21年(2009)11月から23年12月まで。3部構成で全13回放送しました。

完全読解 『坂の上の雲』 佐藤優&片山杜秀

今から3年前の令和4年3月、文藝春秋から発行されたのが、佐藤優と片山杜秀両氏による完全読解の本書です。現在の危機を克服



完全読解 司馬遼太郎
『坂の上の雲』

する上で重要なのは過去から学ぶこと。国民文学とも言われる司馬遼太郎の『坂の上の雲』を読み解いて今後の指針に、との思いです。

作家の佐藤は元外務省主任分析官。慶大教授の片山は思想史研究家。読書家の二人が本書で「乃木希典と東郷平八郎」「夏目漱石と正岡子規」「明石元二郎と広瀬武夫」「日清・日露戦争と朝鮮半島」の4章に分けて語り合っています。伊予松山藩士の子に生まれた秋山好古と真之、正岡子規の三人を中心に紡がれた物語。多角的な視点で論じられていて興味深いです。

顕彰会事務局に朗報! 首都圏の会員一挙に30人入会

周南市在住の一会員から昨年12月末に東京周辺在住の知人30名強が児玉源太郎顕彰会会員になったと事務局に報告がありました。首都圏の会員は少なく、一挙に増えたことは大変嬉しいです。顕彰会の発信力がさらに高まります。そこで経緯や募集方法について次の一文を寄せていただきました。

私が以前勤めていた保険会社で山口県内の勤務がきっかけとなって現在の会社に入社のご縁をいただきました。すでに16年間在住し、周南市が第二の故郷になりました。

昨年11月に元の保険会社のOB会報に寄稿依頼があったので「徳山が生んだ偉人 児玉源太郎をご存じですか」という一文を綴りました。源太郎の足跡、人物像、功績、エピソードなどを詳しく紹介しました。「楽しく読みましたよ」という反響が沢山ありました。

たまたま昨年12月には元の会社の一部門の経験者OB会(東京周辺在住者)が開催。私は児玉源太郎顕彰会会員募集のチャンスと考え、遠方から参加した特権で児玉源太郎の話をもっと聞かせました。長年気心の知れた面々ばかり。和気あいあいの雰囲気の中で私の話を熱心に聴き入ってくれました。意外だったのは、皆さんがよくご存じて児玉ファンも沢山いました。解散後に居残り、源太郎について語り合う人もあり、その人気の高さを実感しました。

最後に「ぜひ顕彰会会員になってほしい」とお願いして顕彰会会員申込書を全員に配布。一か所しかない会場出口に私が陣取り、入会申込書と会費を「徴収」しました。50人の参加者でしたが、思いがけず30人が入会申し込みをしてくれました。なかには顕彰会活動に共感し、高額の寄付を申し出た人もいて感激しました。直接働きかけたことが奏功したと思います。



日露戦争勝利から120年
児玉神社で例祭 30人参列

3月10日は日露戦争の奉天会戦に勝って奉天入城の日から120年。この日、児玉大将をご祭神とした児玉神社(周南市児玉町)で令和7年の例祭が催されました。春の陽気に包まれて境内には台湾の国花でもある梅の花が満開です。

黒神直大宮司が祝詞奏上、神社責任役員の林靖彦さん、児玉源太郎顕彰会副会長の宮本治郎さんらをはじめ、崇敬者30人が参拝しました。児玉源太郎は総参謀長として日露戦争で大活躍。その翌年明治39年病没。享年55。遺徳を偲び、平安を祈りました。



児玉神社の例祭(3月10日)

児玉源太郎と「三五庵」
和菓子「三五庵」命名



源太郎にちなんだ和菓子「三五庵」とその説明書

児玉源太郎の屋敷跡は今、周南市岐山通三丁目の「生誕の地」となっています。家名断絶、再興されて住んだ児玉神社辺りの屋敷の一角には当時、本人が設計した三間ばかりの草ぶきの「三五庵」がありました。東京や台湾、満州などを行き来して多忙な日々、たまに故郷で安らぎを得る貴重な場所でした。軍人、政治家としての功績をたたえて、源太郎が愛した藤の花から紫芋を素材にした最中「三五庵」が生まれました。周南市銀座二丁目の御菓子司「寿美屋」の銘菓で、例祭の直会として愛用されています。

中央乃木會「洗心」200号

東京都港区赤坂8丁目の乃木神社にある中央乃木會(河野克俊會長)が1月1日に『洗心』第200号を発行しました。昭和41年1月創刊。大正12年創建された乃木神社の手水鉢に刻まれている字「洗心」を表題にしています。手を洗い、口をすすぐだけでなく心の汚れをも洗い清めて参拝されることを願って、のことです。

高山陽充宮司は「逸話や遺品を通してその人間性や精神性を論じたものから御祭神の事績、戦史を考察したものなどまことに多彩で、その一つ一つに乃木精神を受け継ぎ、後世に伝えようとする熱い思いが強く感じられる貴重な財(たから)」との言葉を寄せています。理事の新保祐司さん(文芸批評家・都留文科大学名誉教授)の「義の人・乃木大将に倣いて」の一文も「美と義」を論じて興味深いものです。児玉源太郎顕彰会では平成28年の設立以来、会報『藤園』とニュースレター『本丁通信』を届けて情報交換をしています。



『洗心』創刊200号

編集室より

気になる一族

川上 浩史

先日ようやく『日本の台湾人』(ちくま文庫)を読了しました。そのなかで宿刊『児玉源太郎』に登場する台湾人・辜顯榮の子孫の話がありました。

辜顯榮は、満州から凱旋してきた源太郎が、品川駅に迎ええた群衆のなかで握手を求めた人物として描かれているのみですが、『後藤新平伝』にも所々で登場し、また日本の台湾統治当初からの協力者、糖業などで財を成した人物として知られています。

日本と台湾の繋がりを考える際に興味深い一族だな、もう少し知りたいなと思っています。(新南陽郷土史会事務局長)

祈りの心

西崎 博史

児玉源太郎顕彰会も早や9年。今年6月から10年目に入ります。児玉神社の例祭が3月10日、「藤園忌」命日祭が7月24日、徳山藩の初代藩主毛利就隆と幕末の九代藩主毛利元蕃をご祭神とした祐綏神社の例祭が4月3日にそれぞれ執り行われます。

黒神直大宮司の祝詞奏上を拝聴しながらいつも気が引き締まります。ご祭神の遺徳を偲びながら感謝を捧げて世の平安を祈ります。「古事記」「祝詞」の言葉はこの上なく美しいです。本居宣長は「古事記」で語られる道が「たゞ物にゆく道」であると説きます。物とは石ころ、お米、神さまなどすべてを含みます。「物にゆく道」は祈りの心に通じるように思えます。(児玉源太郎顕彰会事務局長)